

岐阜県博物館の講演会について 博物館の生き残り戦略としての催事運営

南本有紀

On the Introduction of Lectures by Gifu Prefectural Museum : Considerations Concerning on Events Management as the Survival Strategy

MINAMIMOTO Yuki

要旨

本稿では、岐阜県博物館の「博物館学芸講座」と題した講演会シリーズを紹介する。これまでに実施した講演会を一覧で整理し、併せて、岐阜県博物館及び日本の博物館における教育普及活動（催事）の歴史について概説する。

岐阜県博物館では、来館・利用者の誘致・増加を図り、催事の対象を年少者から高齢者へ転換し、多くのリピーターを獲得するに至った。その経緯、すなわち、年次による催事構成の変化の推移と講演会シリーズの企画意図と実績、さらに受講者層の特性について総括している。

コロナ対策として整備の進んだICTは、催事の運営にも影響を与えており、オンライン配信による講演会・講座は、催事企画に新たな方向を拓いたといえる。

はじめに：岐阜県博物館の博物館学芸講座

岐阜県博物館では、年間10本程度の講演会シリーズ「博物館学芸講座」を実施している。これは、平成26年度（2014）ごろから開始され、主に成人をターゲットとした催事であり、受講者の多くが地域住民かつ常連参加である。この講演会シリーズは、展覧会関連事業とは別に企画・運営しており、26年度から2023年2月現在まで、累計100回に8,385人が参加し、毎回平均84人が受講する人気イベントとなっている。（表1）

表1 博物館学芸講座 参加状況まとめ

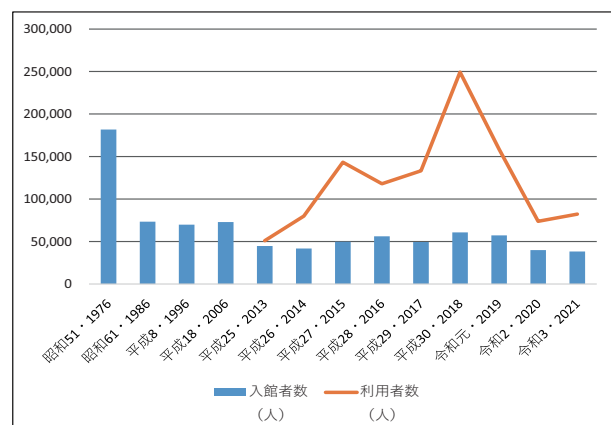
年度	参加者数	実施回数	企画回数	平均参加者数	備考
平成26年度・2014	457	6	6	76.2	定員120人
平成27年度・2015	1,637	15	15	109.1	
平成28年度・2016	2,367	21	21	112.7	定員300人含む
平成29年度・2017	1,178	14	14	84.1	
平成30年度・2018	916	11	13	83.3	
令和元年度・2019	688	8	8	86.0	
令和2年度・2020	213	5	10	42.6	定員65人に半減
令和3年度・2021	393	10	11	39.3	
令和4年度・2022	536	10	10	53.6	定員120人に復旧
合計	8,385	100		83.9	

この盛況は、偏に良質な講師による興味深い講演内容によるものであるが、ブランディングには、当館の来館者減の危機的状況の打開と来館者を増やす努力や工夫があった。これらについてまとめる。

1 閉館危機ショックと生き残り戦略

いまだからこそいえる（書ける）が、岐阜県博物館はかつて、閉館（廃館）の危殆に瀕していた。原因は、来館者数減である。当事者にとって、博物館（展覧会）の評価は数値だけで測れるものではないが、外部からは、入館（入場）者数がわかりやすい評価基準とされる。岐阜県博物館の場合、入館者数は、開館初年度（1976）に18万人を記録して以来、平成10年代まで7万人規模を維持したものの、20年代は5万人、開館40周年を目前にした平成26年度（2014）には4万人程度まで落ちこんでしまっていた。

表2 来館・利用者推移



こうした危機的状況を受けて、「座して（来館を）待

つ」姿勢から、館外へ利用者（潜在的来館者）を求めて「打って出る」積極策へ方針転換を図ったのが、「博物館機能の全県展開」¹で、その内容は、魅力的な博物館コンテンツを館外でも有効活用しつつ、館の認知度を向上させ存在意義を主張する生き残り戦略であった。その結果、来館者の劇的増はないものの、コロナ禍による近年の減を除き、利用者は目に見えて増えている。（表2）

加えて、館外活動（非来館者へのアウトリーチ）の一方、本館では、催事を質的に転換したのが功を奏した。開館40周年記念の冠行事として専門性の高い良質な講演会シリーズを開始し、「大人が楽しめる岐阜県博物館」への脱却をもくろんだのである。このシフトチェンジは、日本社会の少子高齢化基調に合致して、大方の利用者にも歓迎され、現在まで好評のまま継続しているのは冒頭に述べたとおりである。

2 「大人が楽しめる岐阜県博物館」へ

現在の講演会シリーズ誕生の発端は閉館危機、換言すれば、博物館（学芸員）の存在意義に疑問が呈せられたことであり、博物館・学芸員の研究成果を十分に開示・共有してこなかったのではないかとの反省である。このことへの回答、すなわち、博物館活動の蓄積である学術的知見をわかりやすく発信する「大人が楽しめる博物館」の実現に、当館が催事構成をどのように変化させたのか、まずは、ここ最近の推移を具体的に見ていく。なお、本節の元データは、主に、毎年度末に作成する次年度の「催しものリーフレット」（以下、「催事案内」）により²、一部の年度途中の変更（催事の加除変更等）は考慮していない。

現在、岐阜県博物館では、催事を一般（中学生以上）対象の「講演会」と、主に子どもや子どもを含むファミリー対象の「けんぱく教室」（ワークショップ、体験講座）に二分している。ここでの「講演会」には、展覧会（特別展、企画展、移動展等）の理解を促すために会期中に開催する関連講演会だけでなく、岐阜県に関する事柄や時事的な話柄を取り上げる「博物館学芸講座」、三重県総合博物館（以下、「みえむ」）との連携事業として実施する講演会（みえむ連携企画）を含む。

さて、転換前の平成24年度（2012）には、一般向け76本・家族向け17本の計93本の催事を実施している。この数は他館に比しても非常に多い部類で、毎週末には必ず、時には同日に複数のイベントが行われる状況であった。個々の催事の質の低下を招きかねず、現在は、この過半に落ち着いている。

順にみていこう。翌25年の（2013）には、やや数を

減じて、一般向け34本・子ども向け40本の計74本を実施した。この年から、「家族」から「子ども」を対象を微妙に変更し、新たに、「わくわく体験」を開始している。これは、子の体調等で先々の予定が立てにくい、未就学児・小学校低学年児童を含む家族連れが、予約なしに気軽に参加できるように企画したワークショップで、原則、毎週末、予約なし・時間中随時受付のスタイルで運営し、非常な好評を博して、現在も岐阜県博物館の人気定番催事となっているものである。

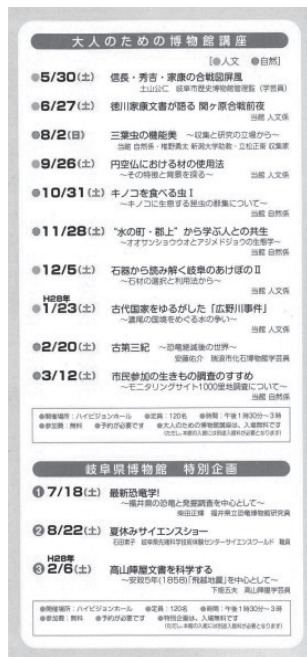
図1 催事案内（2014）より催事一覧

26年度（2014）の催事は、一般向け34本・子ども向け36本の計70本であった。この年の下半期から、

新たに「大人のための博物館講座」（のちの「博物館学芸講座」）を立ち上げ、子ども偏重の催事構成を大人向けに移行させていく契機となる。これは学芸員の調査研究成果発表の場とし、対象を中学生以上とした。講師を岐阜県博物館学芸員が務める4本と、外部講師1本の計5本が実施され、これにより、催事対象者の比重が逆転して、子どもから一般へと、その後の路線を決定することとなった。すなわち、今後、増加する高齢者層を利用者の核に位置づける戦略である。

つぎの27年度（2015）からは、「大人のための博物館講座」が本格始動し、内部講師（学芸員）10＋外部講師3本の計13本を実施した。それ以外の催事は、一般向け39・子ども向け46の計85本であった。この年には、岐阜県博物館本館の展示を他施設で実施する移動展も開始した。アウトリーチ（館外利用者増）とともに、本館来館増を図る事業展開「全県展開」の一環である。

図2 催事案内（2015）より講演会部分



28年度（2016）は岐阜県博物館開館（1976）40周年かつ飛騨美濃合併140周年の年であった。この年から、催事を「子ども向け」「大人向け」「子どもから大人」の広い世代向けの3グループに分類し、それぞれ18・17・13本の計48本を実施した。この年の特徴として周年記念として多数の講演企画を打っている。まず「40周年記念」として5本、各展覧会関連講演会は7本（うち2本は移動展）、加えて「博物館学芸講座」（「大人のための博物館講座」を改称）12本（うち7本が外部講師）と、みえむ連携企画2本で計26本、催事全体では48本である。

図3 催事案内（2016）より講演会部分



また、この年には、県民のコレクションや作品を展示紹介するマイミュージアムギャラリーに、「U-18（ゆーじゅうはち）」枠を設けた。Uはunderの略で、つまり、18歳以下＝高校生の出展枠である。岐阜市立岐阜商業高等学校と岐阜県立岐阜各務野高等学校情報科が生徒作品を展示し、これまでにない博学連携の試みとして各方面に好評であった。この路線は、現在まで継承されており、各種学校団体の出展³を働きかけている。

29年度（2017）は子ども向け10・大人向け10・子どもから大人向け15の計35本（うち、みえむ関連企画ワークショップ1本）の催事を実施し、「博物館学芸講座」14本（うち特別企画5本）、展覧会関連講演会4本、みえむ連携企画2本の計20本の講演会を開催した。これは、年間最多の講演数である。合わせて55本は24年度の半分ほどではあるが、講師の顔ぶれを見ても、大人の受講に耐えうるラインナップで、充実した内容となっていることが宜える。

このころになると、26年度からの継続が実り、「岐阜県博物館の講演会」ブランドがかなり周知されるようになってきた。連続受講する参加者も少なくなく、このとき獲得したリピーターは、現在も常連である。リピーター獲得のために、催しものリーフレットにスタンプカード欄を設け、講座・講演会を5回受講（来場ごとに認定スタンプを押印）すれば、年度末まで使える招待券を贈呈する仕組みを行った。5回どころか、10回達成するヘビーユーザーも現れ、これを契機に毎回受講する層が定着した。

図4 催事案内(2019)より講演会部分

各種講演会
●会場：マイエーゾムホール 3階6号 ●定員：120名
●開演：10:30～15:00 ●参加費：無料
●対象：中学生から大人まで

※催し物の予約は、開催日の2か月前から受け付けます。

博物館学芸講座 特別企画

5/20(土) 関ヶ原合戦と美濃
山口 英(国史大学 教授)

6/24(土) 関ヶ原合戦から大坂の陣へ
北川 大(国史大学 准教授)

11/18(土) ミトコンドリア遺伝子と長寿
～オートファジーが長生きのカギ～
田中 隆雄(京都府立総合医療センター 臨床検査科 部長)

12/2(土) 西之島 vs 鳥類
～ごうして島に生態系が生まれる～
北川 大(国史大学 准教授)

12/16(土) 針で原子を見て、動かし!
～走査型プローブ顕微鏡～
藤田 真(北日本大学理学部理学部 理学部理学センター 教授)

博物館学芸講座

4/22(土) 恐竜進化の足跡
～足の形から探る鳥への進化史～
藤田 真(北日本大学理学部理学部 理学部理学センター 教授)

5/6(土) たかかぜ
～鳥類の進化と生態系をたどる～
藤田 真(北日本大学理学部理学部 理学部理学センター 教授)

6/10(土) 岐阜県にいた絶滅哺乳類
～カリコアリウム種の発見～
中田 真人(北日本大学理学部理学部 理学部理学センター 教授)

7/22(土) 横文雄のスクラップ帳から
～近代日本の「美人」ブーム～
藤田 真(北日本大学理学部理学部 理学部理学センター 教授)

9/2(土) 新発見!石谷文庫から探る本能寺の変
川口 英(国史大学 教授)

9/23(土) 古代寺院からみた飛騨国
三好 清紀(岐阜大学 教授)

11/11(土) 入門 岐阜県の古代史
～美濃・飛騨の古蹟をたどる～
近藤 大典(国史大学 考古学専攻)

2/24(土) えっ!違うの?思い込みの植物たち
～生物多様性と保全～
菅野 哲也(岐阜県立自然史博物館 学芸員)

3/11(日) 備前伝と美濃伝
日本の刀匠について
菅野 哲也(岐阜県立自然史博物館 学芸員)

特別展・企画展 講演会

7/15(土) 地質図からわかる日本の地質
～定年の地質年表の歴史が私たちの生活を支える～
藤田 真(国史大学理学部理学部 理学部理学センター 教授)

8/19(土) 岐阜の大地を生活の中で観る
～地質図や地質図「ジオラマ」の紹介～
中田 真人(北日本大学理学部理学部 理学部理学センター 教授)

10/8(日) 美濃の木箱
～古代史の新たな解明～
市 太郎(国史大学文学部文学研究科 助教授)

10/22(日) 研究者によるリレートーク
「美濃・飛騨の古蹟の探求、そして特設・官舎」
藤田 真(北日本大学理学部理学部 理学部理学センター 教授)
※10:00～12:00、13:00～15:30

三重県総合博物館(MieMu) 交流企画

9/3(日) 講演会
カモシカとそのなまかたち
田村 孝(三重県立自然史博物館 学芸員)

10/7(土) 講演会
壬申の乱と古代の伊勢国、そして齋宮
天野 秀樹(三重県立自然史博物館 学芸員)

11/3(日) 体験ワークショップ
三重県総合博物館 ミュージアム パートナー
※要予約

講座・講演5回参加ごとに招待券2枚進呈
※講演会参加にて本リフレットをご持参いただくスタンプを押します。
※複数回リフレットを拝見されるスタンプは発行できません。
※招待券の申し込み期間は平成30年3月31日までです。

引き換え
確認

お名前

30年度(2018)以降は、講演会シリーズの認知度が高まり、講演会目当ての利用者が一定数見込めるようになったこともあり、催しものリーフレットの表記を「講演会」と「けんぱく教室」に分けるように改め、現在のリーフレットの様式が整った。この年は、講演会21本・けんぱく教室29本、計50本を実施し、翌令和元年度(2019)は講演会19本・けんぱく教室33本、計52本、2年度(2020)は講演会17本・けんぱく教室28本、計45本を実施した。

3 「博物館学芸講座」の戦術

このように「博物館学芸講座」はブランドとして成長し、毎回参加するロイヤリティの高いファン(リピーター)を獲得している。それは、総合博物館の特質から人文・自然史系の広い分野から、岐阜県博物館の守備範囲(恐竜、動物、植物、戦国武将、刀剣など)を中心にバラエティ豊かなトピックの講演会が定期的開催されるという理由に加え、専門家の話を直接聞けるという魅力によるものだろう。当該常連層の特徴として、分野にこだわらず、「毎回」申し込む人が多く、月に1～2度、地元の博物館で先端学術情報に触れる貴重な機会と捉えられているのだと考える。

当館では、学芸員各人が、それぞれの専門分野と世間の関心に合わせて講師を選定しており、結果的にテレビ等で活躍する旬の人が講師を務めることもある。展示(展覧会)に縛られず、自由なテーマ設定できるのが、企画者としても魅力である。訴求力のある企画だからこそ「博物館学芸講座」のみのチラシが成立するし、館内や周辺

施設へ手配りという地道な広報でも集客できている。

一方、前述のスタンプラリーのほか、関市成人大学(現・関市アカデミック講座)や富加町いきいき楽学塾など、類似企画の一講座としての位置付けを近隣市町村に働きかけ(現在は実施していない)、「固定客」の確保を図る等の動員を工夫した。

継続するうち、講師依頼、日程組み、当日の会場設営、シナリオ、支払い事務など、各手続き・手配を効率的に行えるノウハウが蓄積されてくるとともに、過去の実績のおかげで講師を依頼しやすくなってきた(引き受けてもらいやすくなった)。運営サイドも継続は力なのである。

その反面、当初の、学芸員の調査研究の発表という色彩は薄れて、現在のラインナップは外部講師ばかりである。地方都市では接しえない専門家の先端研究に触れる、またとない機会となる一方、端緒となった博物館・学芸員の存在意義のアピールは薄れてきてしまった。岐阜県博物館では学芸員配置の拡充を進めており、調査研究成果をいち早く発信する講演会の機会・機能としての役割は堅持すべきだろう。今後も、地域社会において、博物館ユーザーの知的好奇心に応える活動を維持していきたいと考えている。

4 講演会参加者の動向

「大人が楽しめる」講演会シリーズのターゲット層が、果たしてねらい通りなのか、アンケート⁴から確認する。

岐阜県博物館では、人文系と自然系で参加者層に差異が見られるのが特徴である。人文系の場合、年齢層は、おおよそ70歳代以上が4～6割、60代が2割、50代が1～2割、50代以上で8～9割を占め、40代以下が1～2割となる。県内居住者が圧倒的に多く、90～95%を占める。情報入手先として、3割が催事案内、2割がチラシまたはホームページを、1割がイベント情報配信メール(メールマガジン)を挙げている。以上から、地元在住の高齢者が常連となって何度も足を運んでいるようすが窺える。まさしく企画意図が当たったというべきだろう。

自然系では、参加世代がやや若返って、40代以下が3割程度になる。配信のみのオンライン講演会では、50代を境におよそ半々の配分となった。これは、自然系講演会の参加に、1～2人の小学生を連れた家族連れが多いためである。(人文系では高齢者の単独参加か、夫婦2人連れの参加が多い。)情報収集手段にホームページを挙げる比率も高くなる。申し込み方法にも、この傾向が現れ、人文系はインターネットより電話による申し込みが多い。但し、体感的に電話:ネットが4:6程度に思っていたが、数値で比べると、五分五分で、意外にネッ

ト受付も使われている。これは受付フォームの露出度にも依拠するようで、意識的に受付フォームを宣伝するようになったところ、高齢者層でもネット申し込みが増えてきている。

5 岐阜県博物館と博物館催事史

ここで、博物館の催事の歴史についてまとめておこう。

岐阜県博物館は、昭和46年(1971)11月の置県100年(明治4・1871)記念事業として百年公園(都市公園)内に建設が決定されたもので、翌47年4月に開設準備室を設置し、51年(1976)に開館した。教育普及活動は、開館年から行われており、初年度は映画上映会・民俗芸能(半原文楽⁵、真桑文楽⁶)上演会を実施し、講演会は52年度から展覧会関連事業として開催されている。

全国に目を転じると、1980年代以降、博物館では、教育普及活動が多様化かつ深化し、博物館が地域の教育・文化資源として機能し始める萌芽が見られた。展示の延長としての講座を超越して教育普及活動が展開されるようになってきた⁷とされる。その一方で、博物館における教育(教育普及活動)については、等閑視されがちで、博物館では「保存」第一、「活用」二の次という状態が続き、活用(教育普及活動)への取り組みは2000年代に入ってから、ようやく盛んになった⁸。コロナ禍前(～2019年)には、むしろ、「文化財の活用」「稼ぐ文化財」が急加速して、博物館関係者は不安に駆られた⁹ぐらいだが、コロナ以後は、感染予防のために凶らずもこの流れが押し戻され、現場では、保存と活用のバランスの取れた方向へ是正されてきたように感じている。

映像ライブラリーなどの動画・静止画コンテンツは、国立民族学博物館(1977開館)のビデオテークを端緒¹⁰とし、博物館黎明期から人気コンテンツの筆頭であり、当館でも展示解説用スライド等を盛んに自作していた。岐阜県の特長事情として、世界に先駆けてハイビジョン設備やマルチメディア情報センター(工房)を整備し、デジタルアーカイブにも、1990年代から熱心に取り組んできた¹¹。スマートフォンが普及¹²し、誰もが撮影・編集・発信を行うようになった現在、マルチメディア工房は役目を終えたが、ICT技術の進展で、デジタルアーカイブは新たな展開¹³を見せており、アフター・コロナ時代に当館のアドバンテージが発揮できればと思う。

日本における博物館は、多様な館種を含み、早くから鑑賞教育を主に、意欲的な試みを重ねる美術館¹⁴や、公開実験を交えた一般向け講演会の歴史が古く¹⁵、体験型プログラムの充実した科学館に比べ、一方的な知識伝達型に代表される博物館の催事¹⁶はいささか精彩を欠く。

しかも、これまでの博物館教育の対象は「子ども」たち(児童・生徒)に偏向していたことも否めない。社会的包摂や地域社会の課題解決等、博物館に求められる役割が多様化¹⁷する中、地域に住む「大人」向けに企画した当館の講演会シリーズに、一定の意義と価値を見出してもよいだろうと考えている。

おわりに：コロナを越えて

博物館の危機といえば、新型コロナウイルス感染症の流行、いわゆるコロナ禍(2019-2023 継続中)の影響も甚大であった。

最も影響の大きかった令和3年度(2021)は、講演会18本のうち中止3本、延期4本、オンライン配信2本という大幅な変更を余儀なくされ、けんばく教室にいたっては、予定23本のうち中止8本・延期2本と、大きく影響を受けた。

世の中がwithコロナにシフトし、行動制限をほぼ撤廃して感染予防対策と社会活動を並行する道を探りはじめた本年度(令和4年度・2022)は、講演会14本(うち延期1本)・けんばく教室26本(うち中止3本)の計40本を計画し、コロナ前の催事数に復している。

加えて、感染対策として整備の進んだICTを活かし、普段、博物館に出来ない中高生向けの配信限定講座「中学・高校オンライン講座 めざせ!研究の☆(ほし):技術を仕事にする方法」を新たに企画実施した。別に、岐阜県博物館では、昨年度より、学校等団体利用の閑散期である冬季に、積極的にリモート授業を実施しており、交通手段の不備で来館できない「非利用者層」にも博物館サービスを届ける、コロナの生んだ思わぬ果実となりつつある。

注

¹ [山田昭彦, 2022]

² 併せて、毎年度に発行する館報を参照している。以下から全号のPDFファイルが閲覧できる。

<https://www.gifu-kenpaku.jp/message/kankoubutsu-2/>
³ 2022年度マイミュージアムギャラリー第4回展示「ねお展:アジュール(自由領域)であり続ける地域のこれまでそしてこれから」(会期:2022/10/1～10/30、出席:情報科学芸術大学院大学(IAMAS)他)など。

⁴ 質問項目は、年齢、居住地、情報収集の手段、受講動機、内容理解度・満足度。性別は聞いていない。

⁵ 岐阜県瑞浪市。岐阜県指定重要無形民俗文化財「半原操人形浄瑠璃」。表記は原資料(館報)による。

<https://www.pref.gifu.lg.jp/page/12321.html>

⁶ 岐阜県本巣市に伝承。国指定重要無形民俗文化財。指定名は「真桑人形浄瑠璃」。本稿の表記は、原資料（館報）と地元伝承名による。

<https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/302/78>
(国指定文化財等データベース)

⁷ [新藤浩伸, 2015]

⁸ [三輪嘉六, 2013年1月]

⁹ [青木豊, 2019] [岩城卓二, 2020]

¹⁰ [若月憲夫, 2021]

¹¹ 平成7年(1995)に新館「マイ・ミュージアム棟」を増設し、ハイビジョンホール、マルチメディア工房を開設している。

¹² 「自分専用のケータイ、あるいはスマホを持っている人は全体の68%(中略)そのうちケータイを持っている人が22%、スマホが46%とスマホの所有率の方が高い」[ニフティ株式会社, 2022]

「2021年のシニアのスマートフォン利用率は60代で70.0%、70代は40.6%。この数値は、2年前の2019年と比較すると、それぞれ1割以上利用率を(引用者注: 伸展)」[斉藤徹, 2022]

¹³ 博物館法改正(2022 公布)により、デジタルアーカイブが博物館事業として法的に位置づけられた。

¹⁴ [鬼本佳代子, 2013年1月]

¹⁵ [島尾永康, 2000年11月]

¹⁶ [鈴木章生, 2017] [田中梨枝子, 2021]

¹⁷ [正村美里, 2020年10月]

参考文献

ニフティ株式会社. (2022年9月27日). 【調査結果】小中学生のおよそ7割が自分専用のケータイ・スマホを所有、一番の使い道は「YouTubeなどの動画視聴」. 参照先: ニフティキッズ: 子どものホンネ 調査レポート: <https://kids.nifty.com/parent/research/20220801sumaho/>

岩城卓二. (2020). 博物館と文化財の危機. 人文書院.

鬼本佳代子. (2013年1月). 全国美術館会議学芸員研修での試み: 社会教育・生涯学習の歴史と実践を学ぶ～美術館の教育普及活動を考えるために. 月刊社会教育, 38-43.

三輪嘉六. (2013年1月). 市民とともにある博物館の挑戦: 九州国立博物館・三輪嘉六館長に聞く. 月刊社会教育, 4-12.

山田昭彦. (2022). 収蔵・展示資料を活用した博物館機能の全県展開モデル. 著: 金山喜昭, 博物館とコレクション管理: ポスト・コロナ時代の資料の保管と活用 (ページ: 190-197). 雄山閣.

若月憲夫. (2021). ミュージアム展示と情報発信. 樹村房.
新藤浩伸. (2013年1月). 戦後社会教育と文化行政. 月刊社会教育, 13-19.

新藤浩伸. (2015). 博物館構想の展開と地域学習. 著: 佐藤一子, 地域学習の創造: 地域再生への学びを拓く(ページ: 199-224). 東京大学出版会.

正村美里. (2020年10月). ソーシャルインクルージョンのプラットフォームをめざして: 新たな魅力発信の手法を探る. 博物館研究 55 (10) 629号, 17-21.

青木豊. (2019). 博物館が壊される! 雄山閣.

斉藤徹. (2022年9月13日). 7割以上がキャッシュレス決済を利用! シニア×スマホのリアルを調査. 参照先: 電通報

:<https://dentsu-ho.com/articles/8323#%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E6%A6%82%E8%A6%81>

増田千春. (2002). 地域博物館における教育普及活動の歴史の変遷及びその現状と課題. 博物館學紀要 26, 145-185.

田中梨枝子. (2021). 人文科学・自然科学博物館の歴史の違いと現在の博物館教育への影響について. 都市文化研究 23, 133-143.

島尾永康. (2000年11月). 一般人は科学とどのように接してきたのか: 科学講演の歴史から. 科学 70 (11), 995-999.

福岡辰彦・藤岡達也. (2005). 石川県における<学校外の科学教育の場>についての考察. 日本科学教育学会年会論文集 29, 435-436.

福岡辰彦・藤岡達也. (2005). 戦後日本における<学校外の科学教育>の歴史: 科学教室・講座を中心として. 日本科学教育学会研究会研究報告 19 (6), 23-27.

鈴木章生. (2017). 歴史博物館における教育普及活動の主體的な歴史学習について. 國學院雑誌 118 (11), 99-113.

岐阜県博物館の講演会について 博物館の生き残り戦略としての催事運営

年度	通番	月	日	曜日	注	分野・担当	タイトル・サブタイトル	講師名	講師所属	講演概要(150〜250字程度)	参加	
	9	2	23	土		人文	南本 獅子芝居のすずめ	北河 直子	中野区立歴史民俗資料館学芸員	獅子芝居は獅子頭をかぶって女形を演ずる地芝居(地歌舞伎)で、淨瑠璃や歌舞伎から取り入れた音曲に神楽を加えて、振り付けられた独特の民俗芸能です。美濃には19世紀初頭三河から伝わったといわれ、江戸時代末から近代にかけて、農山村の娯楽として一世を風靡した。大正時代に全盛期を迎え、昭和30年代には廃絶、一部は復活して、いまも恵那市山岡町・下手向白山北畔社、岐阜市白土、岐阜市白土、岐阜市白土で残っています。発祥とされ、昭和時代まで興行されていた愛知県江南市・蒲郡市で行われていた現在の、貴重な事例となっています。講演では、県外の事例を含めた広い視野で獅子芝居の歴史と特徴を紐解き、その魅力に迫ります。	73	
	10	3	16	土		人文	近藤 入門 岐阜県の古代史・美濃・飛騨の人名	近藤 大典	当館人文係 学芸員	古代の美濃国・飛騨国に関する人名は、大宝2年(702)戸籍が残存するなど比較的よく知られており、史料が少ない地方とあって恵まれた状況にあるといわれています。それに加えて近年、陶土に関する木簡や墨書土器などの文字資料の出土が相次ぎ、さらに充実しつつあります。そこで、あらためて木簡を中心にこれらの史料を整理し、人名から古代の美濃国・飛騨国の様子を考察します。	87	
	11	7	7	土	中止	MM	竹中 明治150年・福澤桃介生誕150年記念シンポジウム 受け継がれしもの: 論言から眺みへ、そして現代へ	藤本 尚子	マミージウムギャラリー 出展者	マミージウムギャラリー展示「明治150年・福澤桃介生誕150年記念」論言から眺みへ～日本近代化の軌跡～に開催したシンポジウムです。出展者の藤本尚子さんによる基調講演「未来からの挑戦者 桃介が目指したものの後、各バリエーションがそれぞれの立場から近代化において桃介が築いた役割の魅力を、論言と桃介の関係などについて語ります。	—	
	12	8	26	日		MM	竹中 熱中症歴史倶楽部プレゼンツ:僕らはあの頃の未来に生きている	林 真司 小池 信純	マミージウムギャラリー 出展者	マミージウムギャラリー展示「夢虫!熱虫! 懐かし! 漫画! アニメコレクション」～過去から未来への贈り物～に開催したシンポジウムです。出展者で熱中症歴史倶楽部代表の小池信純さんがナビゲーター役を務め、同じ出展者で手塚治虫グッズコレクターの林真司さん、映像作品コレクターの渡辺淑人さん、藤子不二雄グッズ収集家の福塚高広さんが、それぞれのコレクションの魅力や収集の動機などについて語ります。	41	
	13	10	13	土		MM	竹中 ギネス認定! : 魅力にはまり、始めたくものコレクション	樋口 富喜子	マミージウムギャラリー 出展者	マミージウムギャラリー展示「ギネス認定ものコレクション」～岐阜ゆかりのものたち～に開催した講演会です。出展者の樋口さんご自身が魅惑されてから、15年という長期間でギネスコーナーに認定されるまでの過程を語ります。	45	
平成29年度 2017	1	4	22	土		自然		阪部 創紀	当館自然係 学芸員	恐竜の進化の足り: 足の形から探る鳥への進化史	70	
	2	5	6	土		自然		説田 健一	当館自然係 学芸員	たかが簗: 石河原香がフィリピンで捕獲したシナムワニについて	30	
	3	5	20	土		人文		谷口 央	首都大学東京 教授	関ヶ原合戦と美濃	128	
	4	6	10	土		自然		半田 直人	大阪大学附属博物館 研究支援推進員	岐阜県にいた絶滅哺乳類「カリコテリウム類の発見	61	
	5	6	24	土		人文		北川 央	大阪城天守閣 館長	関ヶ原合戦から大坂の陣へ	121	
	6	7	22	土		人文		南本 有紀	当館人文係 学芸員	探文峰のスクラップ帳から: 近代日本の「美人」ブーム	30	
	7	9	2	土		人文		内池 秀樹	岡山県博物館 学芸主幹	新発見! 石谷家文書から探る本能寺の変	137	
	8	9	23	土		人文		三好 清超	飛騨市教育委員会 主査	古代寺院からみた飛騨国	85	
	9	11	11	土		人文		近藤 大典	当館人文係 学芸員	入門 岐阜県の古代史・美濃国・飛騨国の誕生	124	
	10	11	18	土		自然		田中 雅嗣	東京都健康長寿医療センター 臨床検査科 部長	ミトコンドリア遺伝子と長寿: オートファジーが長生きのカギ	62	
	11	12	2	土		自然		川上 和人	森林総合研究所 主任研究員	西之島 vs 鳥類: こうして島に生態系が生まれた	92	
	12	12	16	土		自然		阿部 真之	大阪大学基礎工学研究科 附属極限科学センター 教授	針で原子を見て、識別して、動かす! : 走査型プローブ顕微鏡	68	
	13	2	24	土		自然		可児 英紀	当館自然係 学芸員	えっ! 違うの? 思い込みの植物たち: 生物多様性と保全	77	
	14	3	11	土		人文		樋野 哲也	備前長船博物館 学芸員	備前伝と美濃伝: 日本刀五ヶ伝について	93	
平成28年度 2016・大人のための博物館講座	1	4	24	日		自然		長沼 毅	広島大学大学院 生物園科学 科 教授	地球歴史から宇宙生命の可能性を探る	263	
	2	5	14	土		自然		伊藤 好孝	名古屋大学 太陽地球環境研究所 教授	地中深くから観る宇宙: ニュートリノから暗黒物質の正体を探る	136	
	3	5	28	土		人文		内堀 信雄	岐阜市社会教育課 課長	守護所から岐阜城・町下町へ: 土岐・斎藤・織田の城町	104	
	4	6	11	土		人文		南本 有紀	当館人文係 学芸員	能の幽霊: 世阿弥の創作法と「幽霊」の造形	73	
	5	6	19	日		自然		岩田 隆浩	宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所 准教授	小惑星探査機「はやぶさ2」が探る太陽系の謎: 小惑星に水と生命の起源を求めよう	115	
	6	7	16	土		自然		東 洋一	福井県立大学 特任教授 福井県立恐竜博物館 特別館長	手取り屑群の恐竜たち	99	
	7	7	23	土		人文		山田 昭彦	当館人文係 学芸員	関ヶ原合戦と美濃の諸将	131	
	8	7	7	日		自然		塩見 和朗	北里大学生命科学研究科 教授	スプーン1杯の土が人類を救う: 微生物の力を借りて農業を創る	173	
	8	8	20	土		自然		河部 壮一郎	当館自然係 学芸員	恐竜の脳科学: 脳から探る恐竜の進化	132	
	8	8	27	土		自然		川上 和人	国立研究開発法人森林総合研究所 主任研究員	鳥類学者 無謀にも恐竜を語る	89	
	9	9	10	土		人文		近藤 大典	当館人文係 学芸員	木簡から見た美濃国諸郡の成立	92	
	10	9	24	土		自然		藤原 慎一	名古屋大学博物館 助教	恐竜やデズモステルスの姿勢を復元してみよう	70	
	9	9	25	日		40周年	人文		矢島 新	跡見学園女子大学 教授	円空の作仏: 日本美術の周辺叢のオリジナリティー	84
	11	10	22	土		40周年	自然		手塚 塚一	岐阜大学大学院 准教授	岐阜しずくプロジェクト: 捨てられる歯から作るIPS細胞を世界に届けるために	98
10	10	23	日		40周年	人文		浅見 龍介	京都国立博物館 城跡研究員 兼 企画室長	円空と日本の風土	117	
12	11	12	土		人文		守屋 靖裕	当館人文係 学芸員	円空仏にみる古仏からの影響: 革新的造形の中に隠れた伝統的造形を探る	136		
13	11	20	日		40周年	人文		福田 千鶴	九州大学 教授	大坂の陣と美濃	114	
14	12	3	土		40周年	人文		滋賀県立大学人間文化学部 教授	美濃の城: 戦国の城から織田・豊臣の城へ	101		
15	12	17	土		40周年	自然		説田 健一	当館自然係 学芸員	旅するアッコ: 鳥類学黎明期の豪商コレクターの生き様	104	
16	2	25	土		40周年	自然		河部 壮一郎 小田 隆	当館自然係 学芸員 成安造形大学	ホネからはじまる恐竜の復元: アーティストと科学者の共演	100	
17	3	25	土		40周年	自然		大林 達生	中津川博物館 館長	再発見! 恵那山の地質	60	

南本 有紀

年度	通番	月	日	曜日	注	分野・担当	タイトル・サブタイトル	講師名	講師肩書き	講演概要(150~250字程度)	参加		
平成27年度 2015・大人のための博物館講座	1	5	30	土		人文	信長・秀吉・家康の合戦図屏風	土山 公仁	岐阜市歴史博物館 管理監(学芸員)		117		
	2	6	27	土		人文	徳川家康文書が語る 関ヶ原合戦前夜	山田 昭彦	当館学芸員		135		
		7	18	土		特別企画	自然	最新恐竜学！:福井県の恐竜と発掘調査を中心として	柴田 正輝	福井県立恐竜博物館 研究員		108	
		3	8	2	日		自然	三葉虫の機能美・収集と研究の立場から	西谷 徹 立松 正衛 樺野 勇太	当館学芸員 新潟大学理学部助教		89	
		8	22	土		特別企画	自然	夏休みサイエンスショー	石田 素子	岐阜県先端科学技術体験センター サイエンスワールド職員		103	
		4	9	26	土		人文	円空仏における材の使用法;その特徴と背景を探る	守屋 靖裕	当館学芸員		89	
		5	10	31	土		自然	キノコを食べる虫Ⅰ:キノコに生息する昆虫の群集について	説田 健一	当館学芸員		56	
		6	11	28	土		自然	“水の町・郡上”から学ぶ人との共生:オオサンショウウオとアジメドジョウの生態学	松戸 智	当館学芸員		57	
		7	12	5	土		人文	石器から読み解く岐阜のあけぼのⅡ:石材の選別と利用法から	長屋 幸二	岐阜県立関高等学校教諭		90	
			12	27	日		移動展	自然	大垣市赤坂に残された史上最大の生物絶滅の記憶	磯崎 行雄	東京大学大学院総合文化研究科広域化学専攻広域システム科学系教授	大垣市赤坂の石灰岩には、世界でも稀な古生代末の大量絶滅の記録が残されています。本講演では、赤坂をはじめ日本や世界の他地域の調査から明らかにされた地球史上最大の大量絶滅事件を解説し、その原因を探ります。最新の研究からわかってきた地球史上最大の大量絶滅事件について、国際的にこの分野を牽引してこられた研究者自身から話を聞くことができる貴重な機会です。	241
		8	1	23	土		人文	古代国家をゆるがした「広野川事件」:濃尾の国境をめぐる水の争い	山田 昭彦	当館学芸員		113	
		2	6	土		特別企画	人文	高山陣屋文書を科学する:安政5年(1858)「飛越地震」を中心として	下畑 五夫	高山陣屋 学芸員		63	
		9	2	20	土		自然	古第三紀:恐竜絶滅後の世界	安藤 佑介	瑞浪市化石博物館 学芸員		82	
			2	20	土		40周年	自然	岐阜の英知:文化勲章受章者からの提言	末松 安晴 中西 重忠	東京工業大学名誉教授 京都大学名誉教授	故郷が生んだ2015年文化勲章受章者の末松博士と中西博士を講師にお迎えして特別講演会を開催します。本特別講演会では、日本を代表する科学者である両博士に「志」を立て「夢」を持って進まれた「未知への挑戦」や実現された「素晴らしい業績」などについてご講演いただくとともに、未来を担う皆さんへ、今こそ伝えたい「提言」をしていただきます。	258
		10	3	12	土		自然	市民参加の生きもの調査のすすめ:モニタリングサイト1000里地調査について	説田 健一	当館学芸員		36	
	平成26年度 2014		7	26	土			脳形態から追える古生物の姿:解剖学と古生物学が出会うとき	河部 壮一郎	当館学芸員		101	
			10	11	土			博物館×オカルト×岐阜:特別展「奇なるものへの挑戦」ができるまで	南本 有紀	当館学芸員		58	
		11	1	土		特別企画		宇宙への誘い:“きぼう”ハイビジョン映像で学ぶ宇宙の魅力	吉富 進	日本宇宙フォーラム 常務理事		88	
		12	6	土				石器から読み解く岐阜のあけぼの:石器時代の「人」・「社会」への考古学的アプローチ	長屋 幸二	当館学芸員		59	
		2	22	日		MMG	MM	福沢諭吉のユーモア精神	坂本 浩一	マイミュージアムギャラリー 出展者		67	
	3	22	日				絶滅した珍獣「デスマスチルス類」の進化史を塗り替える新発見!	河部 壮一郎	当館学芸員		84		
合計											8,385		
中止・延期											8		

資料

岐阜県博物館「博物館学芸講座」について

1 趣旨と目的

「博物館学芸講座」は、県民の歴史・芸術・民俗・産業・自然科学等に対する知的好奇心を喚起し、文化振興に寄与することを目的として実施する岐阜県博物館（以下、「当館」といいます）の講演会です。当館の職員（学芸員）のほか外部の有識者が講師を務め、岐阜県及び当館事業（特別展・企画展・常設展示など催事）に関連するテーマや当館事業のテーマに関する最新学術情報等を取り上げます。

平成 28 年度より開始した事業です。過去の実績は別表をご覧ください。

2 講演会の概要

- 回数 年間 10 回程度
- 開催日 当館開館日の土日・祝祭日
- 講演時間 90 分程度
- 場所・定員 当館けんぱくホール（定員 120 人）
- ※ 新型コロナウイルス感染症予防のため、当分の間、半数の 65 人で運用（2021 年 9 月現在）
- 講師 当館職員、もしくは、外部有識者
- 参加・対象者 中学生以上

3 講演依頼等手続き

- 当館より所属機関へ派遣依頼を发出します。
- その他必要な手続きについては実際の依頼書にご指示ください。

4 講演会に係る経費

- 岐阜県会計規則に基づき、旅費と報償費をお支払いします。なお、精算払い（事後振込）となります。但し、公務員の方は報償費の受け取りについて所属機関に予めご確認ください。
- 旅費は、原則として公共交通機関利用とし、勤務地または自宅から JR 岐阜駅までの往復で計算します。JR 岐阜駅からは当館公用車にて送迎いたします。
- 振込口座を事前に登録いただきます。手続きは依頼書にご案内いたします。

5 講演会場・機材

- 会場は当館けんぱくホール（プロジェクトスクリーン等機器一式、演壇、階段状座席 129 席、定員 120 人）を使用します。企画によって館外施設（岐阜県図書館・多目的大ホール（定員 300 人）など）を使用することもあります。
- PC 接続によりパワーポイント等がご利用になれます。実物投影機なども使用できます。詳しい機器仕様は依頼書にご案内します。

6 著作権処理

- 講演会は講師の口述による著作物であり、当館が講師に無断で録画・録音することはありません。但し、発表及び配布資料は、講師側にて著作権処理をお願いいたします。
- 講演会事業の広報、当館ホームページやツイッターでの情報発信として講演の記録写真を撮影・公開することがあります。
- その他、著作権の許諾については詳細は依頼書にご相談します。